

青髭 1 3

明宏訊

試されている……やがて、そんな厭世的な気分には浸っている暇はないほどに、矢継ぎ早にアンリは判断を求められるようになる。

誰にか？

当然のことだが主君たる伯爵に、である。

平民の戦闘訓練を行うというので従子爵は突如として部屋から連れ出された。父親のノートを教科書として学ぶことと、判断を同時に行わなければならない煩雑さに気が狂いそうになった。ちなみに、父が書き残していた手下についてはすぐに判明した。アンナがそれとなく教えてくれた、というよりは紹介してくれた。回廊に穿たれた銃眼越しに外を見ろというのである。彼女が指差す先にはたしかに、大変に薄い青い血の雰囲気醸し出されていた。その元をみれば、視力を先に感覚が彼らを検知していた。

「どうして、城に入ってこないのだ？……いや、でしょう？」

「アンリさま、私に敬語をつかう必要はありません……私はあくまでもこの城の女官長、あくまでも、召使ですから、彼らは青い血が薄いためにこの城の結界内に入れなのです。お父上もここから指示を出しておられました」

「直接、コミュニケーションを取りたいのだが…」

「彼らは闇の生きる者たちです。自分たちの姿をさらすことを潔しとしません」

「赤い血の者として、直接、私を会話するぞ…」

「それとは意味合いが違うのです。彼らにも自尊心があります」

そういうやり取りがあって、アンナのいう闇の者たちと初めて会話が成り立った。しかし、アンリはなんとしても面会してみたいと考えていた。

彼らの報告は、カルッカソム伯爵領土内を隅から隅まで網羅していた。農作物のできから民心の感情まで多岐にわたっていた。それぞれに指示を与えなければならない。しかし、ノートでもわからないことがある。それに自分でもわかっているのだが、何等かの精神的な障壁があってアンナに尋ねることは憚られた。それゆえに、回答に支障をきたすことも多い。主君は顔を合わすたびに「よくやってる」と繰り返すだけだったが、それが自己に対する正当な評価にはおもえないのだった。

そんなやりとりをしている間に伯爵が入室してきたのである。

「今日は、戦の訓練を行う」

「なんですって？そんなご予定は閣下の予定にはないと思いますが」

「今の今まで黙っていた」

「それは、よほどの機密事項なのでしょうね…」

そうではないと確信してのことである。戦闘訓練というからには平民たちに命令が下っているはずなのだ。

「しかし、これから農作業が始まる季節だというのに、彼らもたびたび、閣下の気まぐれに引っ掻き回されては迷惑でしょうな」

平民をだしにして彼らに自分の本心を言わせたのである。

「とにかく、ヴェルサイユに向かう。当地でアンナが待っている」

「ヴェルサイユですって？」

「知らなくてもしょうがない。わが領土でも指折りの寒村だからな。余も子供のころに遊びに行ったきりだ……」

「いえ、報告がありました。かの地の民心がささくれ立っていると……私とて無能ではありません、おそらくは命令された戦の訓練を前にしていきり立っているのでしょう。それにしても笑えませぬ、赤い血ごときが戦とは……」

「闇のものとそこまでやり取りをしているのか、さすが、彼の息子だ。隣地のパリとの戦いとなる。これは彼らには単なる訓練ではないぞ。用水権が絡んでいるからな」

「アンナ殿……アンナはすでに向こうに行っているのですか？」

「彼女にはパリを指揮してもらう……」

主君が何を言っているのか、アンリは理解できなかった。「教科書」にそのことが詳細に書かれているページはあるのだが、あいにくと、そこまで読了していなかったのである。それにしても、用水権という農民にとってみれば重要な問題を、アンリに言わせれば戦のマネゴトで決定させられるとは、彼らも哀れだとは思ふ。主君は、家臣の思いを読み取ったように言った。二人とも、すでに馬上の人となっている。

「太陽がまぶしいな。なんだ、アンリ、こんなことで彼らにとって重要な問題を決めさせるのはあんまりだと思うか？彼ら自身の手で決めさせるのだから、シラーたちの言葉を借りれば啓蒙的となるのではないか？」

失笑を抑えきれないというかんじで伯爵は言の葉を中空に舞わせる。

「歴史をひも解けば、文字を知らない彼らには関係のないことだが、どちらが優先権を持っているのか、いくら過去にさかのぼっても答えは出ない。ならば、彼らに決めさせればいいではないか……」

さらに伯爵が畳み掛けた。そして、それにアンリが自分の考えを述べようとしたところで、平民の家族連れがやってきた。

二人を認めたとたんに、足下ならぬ馬脚下に這いつくばった。

「ごくろう……」

「従子爵さま、今日はやけに別嬪さまをお連れですな……」

「なに？」

蚊ほどにもそちらに注意を向けていなかったアンリだが、「別嬪」という言葉に意識が注視された。

「……」

少しばかりの間があって、すぐに事の真相が理解できた。彼の主君は魔法によって自己をごまかしているのだ。青い血が身体を巡っている自分には通じないのだろう。しかし、女性に変化しているとは驚きだ。好奇心に負けて、横目で微笑を浮かべている主君を確認しながら聞いてみた

。

「年齢はいかほどに見えるか？」

「17歳くらいでしょうか？」

どうしてこんなことを聞くのかと、農夫らしい40がらみの男は答えた。いったい、彼の目にはどんな風に伯爵が映っているのか、大変に気になるが鷹揚に笑っているばかりでいくら見つめても農夫がというような美少女にはみえない。

「閣下、それほどまでに領民たちに自分を表に出されない、それには深い理由があるのでしょうか？」

「いづれ、わかることさ。アンヌはすでに目的地に到着しているはずだ。急ごう」

軽く馬に鞭をくると伯爵はすぐに遠近法に従って小さくなった。逆の方向をみると、いまだ、農夫の家族は地べたに這いつくばっている。青い血は彼らにとって恐れと信仰の対象であることは言うまでもないことだが、この地にあってはそれ以上のもののようにみえる。そして、それは伯爵が意識して演出しているようにすら見えた。だが、その真意は計り知れない。父親以上にわけがわからない人のようだ。

アンヌも馬にギャロップを要請する。

しばらくすると伯爵は馬に草を食ませているところだった。従子爵に気が付くと道々、目的地に関するレクチャーを始めた。

山と山に挟まれた、いわば山岳地帯にヴェルサイユとパリは隣接している。その狭隘な平地において両者を分かつのは、ミラノ帝国時代に造られたと思われる水路のみである。これを巡って両者は果てしない争いを続けてきた歴史がある。

上流を取るか、下流を取るか、ただ、そのことだけを巡って多くの血が流れてきたのだ。

戦術的にみても要地といえず、しかも、穀倉地帯では間違ってもあり得ない貧弱な土地のために、歴代伯爵のなかには無関心を決め込んだ当主もいるくらいだ。

いうまでもなく、水路の付近に畑は並んでいるが、毎日、横目で互いに敵視しながらの作業を続けている。お互いの家に先祖代々、口話で何代前の伯爵様によってここそこは貸与されたの、そうではないの、という与太話が伝わっている。

進むにつれて道はかなり狭くなっていく、こんなところで数百人規模の男たちを集められるのか不思議だった。それにしても、アンヌと戦わせるとはどういうことだろう？ 生きた人間でチェスでもさせようという考えだろうか？ いくら主君の端整な横顔を見つめても答えが出そうにない。

。